竜楽のおじゃまします！

日本の政治を国際的な目で見ると!!

三遊亭竜楽　落語家

さんゆうてい・りゅうらく　1982年中央大学法学部卒。85年三遊亭円楽に入門、93年真打昇進。日本放送作家協会会員。日本脚本家連盟所属。中央大学では、学員講師として各地で講演を行う。

リード教授

Reed, Steven R　1947年、アメリカインディアナ州に生まれる。ミシガン大学大学院を出たあとアラバマ大学、ハーバード大学で教鞭をとり、1993年から中央大学総合政策学部の教授となり現在に至る。

最初から政治談義で始まる

竜楽　何であんなに自民党は強いんですかね。

リード　いま自民党、強くないですよ。

竜楽　そうですか？

リード　奇策を繰り返してきましたが、小泉さんは長期的な自民党の問題を解決したわけではありません。小泉さんは2勝2敗です。みんな勝ったことだけを「すごい、すごい」と言ったけれども、負けたのが2回あるんです。２００１年の参議院選挙に勝った。そのあとの２００３年は負けた。そのときは、実は民主党は候補者さえいれば勝ったんです。比例で勝ったわけですからね。そして、２００４年の参議院選挙は負け、２００５年に勝った。だから、2勝2敗です。今までと何が違うかというと、小泉さんが自民党と戦ったことですよ。最初は田中真紀子さんと一緒に、「自民党をぶち壊す」と言って人気が上がったでしょう。2回目は抵抗勢力を追い出して、ぶち壊したということで人気が上がるんですよ。自民党は全然人気がないんです。

竜楽　自民党を敵にして勝ったということですか。

リード　そうです。民主党の売り物を盗んで勝ったと言えるんです。二大政党制では、野党の一番良い政策を盗むことは別に珍しくないんです。その当時は前原さんでしたが、党首討論のときに評論家はみんな、前原さんは自民党に入ってもいいんじゃないですか。いやいや、小泉さんは民主党ですよという話さえでました。

竜楽　何か自民党が二つあるみたいな感じがしました。

リード　そうですね。自民党は一貫性がないというのが、従来からの秘訣です。自民党の候補者はバラバラでしょう。だから、自民党の政策が嫌いなら、自民党の政策に反対の候補者に一票入れればいいんです。いま政権交代が十分想像できるようになったんですから。

竜楽　とにかく選挙に出たい人って、結構いるじゃないですか。自民党でも民主党でも、とにかくどっちでもいいから出たいと。

リード　今どっちでもいいと言いましたが、それこそが二大政党制なんですよ。

竜楽　どちらを選ぶにしても、以前の野党的な政策と違って、似通ったものの二者択一になっているんですね。

リード　二大政党制とはそういうものですよ。だから多くの人が、民主党は本当に野党かどうか迷うんですが、昔の社会党のような本当の野党だったら、万年野党ですよ。万年野党ほしい？　いらないよ（笑）。

竜楽　間違いなく二大政党制に向かって行くんですね。

リード　なったんです。

竜楽　もうなったんですか。

リード　もうなったんですよ。だけど、それを言っているのは私一人だけですが（笑）。94年の時に、なると予測したんですよ。今回の選挙で大勝したと言っても、自民党と公明党を併せても、50％の得票率には届かない。逆転は簡単にできます。政権交代は次の3選挙以内で。

竜楽　えっ！　そうですか。

リード　次の選挙は、自民党が2回連続で圧勝するわけはないから票を減らして、議席を減らします。

竜楽　小泉さんが代わりましたが。

リード　小泉さんの時代は、自民党は二大政党制の一つの大政党になるために、一貫性がある、マニフェストの存在する、みんな同じようなことを言っている政党に進んだんです。派閥をかなり壊したのは確実で、党首の指導力を発揮しました。その結果、自民党の改革としての採点はAです。しかし、最終試験は次の人、つまり安倍さんがどう動くかです。

竜楽　小選挙区制をとったということが、二大政党制への一番大きい要因と言えるんですね。

リード　いちばん大きいですね。いろいろ問題はありましたが、小選挙区制になってから改革できるようになった。それから、どうして各地の選挙区へ刺客を出すことができたかというと、比例区という制度があるからですよ。

竜楽　比例との重複で出馬するのは、変わったシステムなんですか。

リード　いや、普通です。日本では変わったシステムだと思われがちですが、それは、アメリカと比較するからで、ヨーロッパでは普通のことです。

竜楽　そうなんですか。

リード　イタリアでベルルスコーニ党首は全部の小選挙区に出たことがあるんですよ。だけど、比例で当選しました。彼はフォルツァ・イタリアという政党を、ベルルスコーニの政党だと印象付けたわけですね。

竜楽　なるほど、そんな手もあるんですね。だけど、日本では、候補者がその土地に生まれ育つか、あるいは東京に行ってまた戻ってきて選挙するというのが多いようですが、外国ではどうですか？

リード　あまり変わりませんが最近では必ずしもそこになじんだ人ではない「刺客」が勝つ場合がある。中選挙区制時代だったら、別の選挙区から出たら、もう無理。自分の後援会のあるところ、地盤がちゃんとあるところで出ないとだめですよ。ところが最近は、別の選挙区に移籍することは、多少の損はあっても前ほどではないんです。

竜楽　例えばそこの出身者をあえて出さないということは、世界的にはどうなんですか。

リード　フランスは、落下傘候補者が多いんですよ。落下傘という

言葉は、実はフランス語から翻訳された単語なんです。そして、それはほとんどが官僚です。エリート官僚がこの選挙区から出るということで「私は偉いんですから入れてください」ということです。昔の日本も、東大卒、内務省でよろしくと、それだけで当選する。その時代はだいぶ前に終わったんです。その後は地盤を作って、後援会を作って、お父さんが作ってくれればそれが一番(笑)。そして現在は、政策とか制度を一気に変える過程に入っています。

竜楽　そうすると、自民党の派閥というのはなくなっていくんですか。

リード　組織というものは、この世の中でほとんどなくなることはないんですよ。変化はするでしょう。そして、今も変化しています。

日本へのきっかけは

竜楽　私が個人的に聞きたいことが多くて、先生のご専門の話ばかりになってしまいました。そろそろ皆さんに、先生をご紹介しないといけないと思うんですが（笑）。

リード　私は専門の話についてだったら、いつまでも何時間でもいい（笑）。

竜楽　今までお話いただいたような日本政治については、いつ頃から興味をお持ちになったんですか。

リード　博士論文は、76年、77年で、日本の地方自治でした。そして、その後日本の政治を研究してきました。

竜楽　それまで来日したことはあったんですか。

リード　何回かありました。

竜楽　来日した最初のきっかけは何ですか？

リード　ベトナム戦争時代に徴兵になって、そのときに普通ならベトナム戦争に参加することになりますが、軍隊が兵役期間をもう少し長くしたら、別の選択肢があるというので、そちらを選びました。そして、私は4年間を約束して、言語学校に行き中国語を勉強しました。ところが、中国語を勉強したあとで軍隊の都合で日本の博多へ派遣されたんです。当時はハカタベースと言われていました。今は遊園地になったそうです。それは進歩ですね(笑)。実は、私は軍隊が大嫌いだったので、できるだけ軍隊と関係ない人と話したくて日本語を勉強し始めたんです。

竜楽　博多には何年いらしたんですか。

リード　2年間ちょっと。ベトナム戦争が終わりつつあって、早めに退役を許されました。

竜楽　そのときには、政治学の勉強は？

リード　大学から政治学は勉強していましたが、日本政治については全然知らなかったんです。

竜楽　その後はどういう経緯をたどったんですか。

リード　軍隊を出て、アメリカで大学院に進んで、更に政治学を勉強することになったんですが、どこの国の政治を勉強するか決めるとき、中国語と日本語はある程度できたことと、当時は中国に入国できなかったので、研究テーマを日本政治に決めました。

竜楽　それで再び日本へですか。政治の研究というのは、どのようにするんですか。

リード　私は新聞を読むことがいちばん多いですね。今日も読売新聞、朝日新聞などに目を通して、政治に関係する記事はコピーしてファイルに入れます。それから地方新聞です。毎日見ているのは、北海道新聞、秋田魁新報、青森東奥日報、栃木の下野新聞、そして師匠の故郷の上毛新聞も読んで。

竜楽　ありがとうございます。

リード　そして神奈川新聞、神戸新聞、宮崎新聞などは毎日目を通しているんですよ。あとは知事選挙のような特別なことがあったら、その土地の新聞です。出口調査は地方紙にしか載らないんです。これを学生に提供するでしょう。すると学生は、自分の選挙区がどうなっているか興味を持ち始めるんです。

竜楽　地方紙を見ると、かなり細かな動きがわかるんですか。相当な

時間がかかりますよね。

リード　政治関係のニュースは、実はあまりないんです。選挙が近づくと忙しいですが。今日は全部合わせても3時間以内でした。

竜楽　ところで、研究での来日期間はどのくらいでしたか。

リード　そのときは1年間です。博士論文を書くために、比較政治学をやる人は、自分の専門の国に1年間行くのがきまりです。

竜楽　大学はどちらですか。

リード　ミシガン大学です。

竜楽　研究テーマは地方自治ですよね。

リード　はい。当時は、革新知事、革新市長というのが話題になったんです。そこで選んだ県は、佐賀県、埼玉県、千葉県でした。佐賀県を選んだのは地方が一つ必要だったことと、家内が長崎出身ですから、研究に合う長崎にいちばん近い県ということで選びました。千葉、埼玉は、何度も調査に行かなければならないことから隣の県で通いやすいことと、当時の埼玉県は革新知事だったので、比較しやすいと思ったんです。

竜楽　佐賀はどうでしたか。

リード　佐賀は意外と面白いですよ。

竜楽　ぼくは最近、仕事で佐賀にけっこう行くんですよ。

リード　日本酒がおいしい（笑）。

竜楽　食べ物は何でもうまいですよね。ところで、日本に1年間いらして、その後戻られて、再びこんなに長く……。

リード　結局、就職したのはアラバマ大学でした。田舎の大学ですから、私はそこから移りたいという気持ちがあったんですよ。そして日本からの話がありました。私は日本に行くことにも日本語で教えることにも魅力を感じました。それで決めたんです。

竜楽　奥様のご実家が長崎というお話が出ましたが、出会いは？

リード　陸軍時代です。

竜楽　ああ、そうか九州で。

リード　彼女は九州大学病院の看護婦でした。

竜楽　入院でもされて？

リード　学生向けには、ちゃんとした作り話があるんですが、それは止めて、実際は、彼女の病院には看護婦の一人を定期的にカナダで勉強させる制度があって、彼女はそれを目指して英語の勉強をしていたんです。その頃、アメリカ人も日本人も集まる「もみの木」という飲み屋がありまして、そこで知り合ったんです。最初のきっかけはトランプでした。実は私はトランプが強いんです。ゲームだったら、だいたい勝つ人ですよ。それなのに、最初に彼女が勝ったんです。そんなはずはない、私は飲んでいるからもう少し集中してというので、もう一回やって、また負けたんですよ。何回連続負けたのかな。結局、勝てないということがわかったんです。そのときに、この人はただ者ではないと思いました。

竜楽　それが気に入って。

リード　二つのことがあるんです。一つはこの人は頭がいい、ただ者ではないということ。もう一つは、女性はよく男性に対して自分の弱さを見せるでしょう。私はそういう女性は嫌い（笑）。それがよかったんですよ。彼女は負けようとしてもできずにどうしても頑張る人です。私もどうしても頑張る人ですから。

竜楽　そのときに手加減をしなかったんですね。

リード　もし、彼女が意図的に負けていたら、結婚していないと思います。

竜楽　奥様のご家族の反対はなかったんですか。

リード　ありましたよ。話を聞いた時点で、長崎のお父さんが電車に乗って博多まで来て、絶対にだめだと言われました。しかし、彼女が決めたら、決まりですよ。お父さんもそのことはあまり理解していなかったようです。

竜楽　奥様は意志の強い人のようですね。

リード　私のほうが負けっぱなしですよ（笑）。私は電車に乗って長

崎に行き、正式にご両親に会うことにしました。一般論としては、アメリカの軍人と結婚するという話だったら、反対するでしょう。でも、会ってみて、家内のお父さんと話がすごく合ったんです。彼も政治家の後援会の仕事もやっていたし、それに日本語はある程度できる。それで、アメリカの軍人はだめだけど、この人だったら一応何とか（笑）。だけどご両親は、我々が結婚してアメリカに行ったら二度と日本には帰ってこないのではないかと心配したようです。それで私は約束したんです、博士論文のための研究で、必ず日本に戻って来ると。ご両親は、たぶん無理だろうと思っていたでしょうが、再び日本に戻ってきた時点で、本当に信頼されるようになりました。

竜楽　研究中の1年間の住まいは、やはり東京ですか。

リード　はい。佐賀県には3カ月でしたが、行ったり来たりしました。そして、そのときには孫もいましたから、それはだいたい問題を全部解決するものですからね（笑）。

竜楽　奥様はアメリカに行かれて、すんなりと適合できたんですか。

リード　いや、いろいろな面で本当に大変だったと思います。一つは英語で困ったんですよ。実は、日本で英語を勉強することは逆効果が多いんです。アメリカに行って訓練したほうがずっといい。だから、最初はかなり困ってしまい、結局は自分が看護婦を続けることは、無理だと諦めたんです。それもかなりショックだったと思います。しかも、私が大学院生ということで、生活は豊かではないし、本当に困ったと思います。それで最初は趣味として始めた絵を描く仕事を成功させて、ボストンでも画廊を持つまでになったんです。しかし、娘が全寮制高校に入った時点で、更にお金が必要になって絵を休んで貿易に関わる仕事を始め、それも一応成功させたんですよ。

竜楽　奥様には芸術や経営の才覚がおありなんですね。

リード　そうですね。家内がこれから何をやるか、予測することはちょっと無理でしょう（笑）。政治だったら簡単ですけど、だから黙って見るしかないんですよ。そして何かあったら応援する、それしかないんです。

竜楽　ところで、話を戻しますが、日本政治のどういうところが面白いんですか？

リード　研究についてだけで言えば、特に日本でなければならないという訳ではなかったのですが、日本がアジアの中で最も進んだ先進国だった点や、欧米とどの程度違うかということに、興味があったんです。

竜楽　特別に日本がどう……。

リード　ではない。

竜楽　たまたま日本にいたからということですか。

リード　実は日本語ができるし、日本研究をやりながら面白さを見つけたんです。自民党政権が長期的になったということは、比較政治学者にとっては面白いんですよ。これはイタリアとすごく似ている。

竜楽　日本人はよく「日本はどうですか」ということを聞きたがりませんか。

リード　そうそう。だから、学生は私に不満があると思いますよ。私は特徴の話はしないで、ヨーロッパのどの国に似ているかということを話します。これといった特徴がないからです。

竜楽　そうなんですか？

リード　日本文化の特徴の一つとして考えれば、全部やり方が決まっているということです。アメリカはジャズで、自分なりにやるでしょう。しかし、日本人は何かマニュアルがあって、やり方がちゃんとあって、それが一般論で、だいたい例外はない。

竜楽　なるほど、確かに日本の特

徴としては、同じことを繰り返して、マニュアルどおりにやっていくというのは、もともと強いですね。芸能なんかですと、何代目というのがありますからね。

リード　それはかなりきちんと系列を続けるということですね。

竜楽　形をずっと続けていく。そういう点で、オリジナリティよりも型の継承といいますか、そういうのが強いのかなと思うんですが。

リード　確かにそうですね。だから、両方の国が必要なんですよ。

授業、日本式とアメリカ式

竜楽　そうすると、先生から見た日本の学生、特に中央大学の学生や中央大学という大学はどのように感じておられますか。

リード　日本の大学1年生は、アメリカの1年生よりずっとまし。

竜楽　えっ！　そうですか。

リード　基礎がちゃんとついている。知識がある。元気がある。小学校1年生から高校を卒業するまでは、日本の教育制度のほうがアメリカよりずっといいんです。アメリカは一貫性がないし、文科省はないし、市町村別にやっているわけですから、いい学校も悪い学校もあって、悪い学校は日本では絶対許さないような低レベルです。実は私の小学校は、かなりひどかったんですよ。結局、字を読めるようになったのはお母さんのおかげです。しかし、大学の教育は、日本はあまり良くない。中央大学の総合政策学部は、それを改善するという目的を持っているんですが、結局いちばん面白い学生は1年生。そして、次は2年生。就職活動が始まると、結局、勉強する気があってもできなくなってしまう。

竜楽　なるほど。

リード　まずは、就職が優先されるでしょう。それに、どうしても4年間で卒業させないと、受験生が集まってこない。

竜楽　でも、そのなかで学問を究めるというか、ある程度レベルアップする方法というのは何ですか。

リード　日本の学生はかなり面白いんですよ。勉強する気があったら、アメリカで大学院生しかできないようなことができるんです。

竜楽　それは環境の違いですか。

リード　そうです。アメリカでは高校までは何も知らないから、大学に入ってからはじめて勉強する人が多いんです。つまり、アメリカが強いのは大学院で、日本が強いのは小学校。だから言語の問題がない限り、日本の高校生がアメリカの大学に行くのが一番良いかも知れません(笑)。私は、ある意味でそれを中央大学でやっているんです。日本語でアメリカ式の授業を教えています。

竜楽　アメリカ式の授業というのはどういうことですか。

リード　日本では、テキストのうちのこれだけ覚えたら試験に合格できるということになっている。だから、政治学であればどのテキストでもいいし、どの先生の授業でも似たようなことをやるから、正解は一つになるんです。しかし、アメリカのテキストは地図です。政治学はこういうものですよ。このなのもあるし、あんなのもある。これをもう少し深く知りたいのなら、或いはこれに興味があったら、参考文献はこれだと『地図』を提供し、学生の興味に沿って勉強させる。だから、これだけ覚えてくださいということはないんです。考えようによっては、私の講義は難しいと思いますよ。情報はいっぱい入っているけど、全部覚える必要はないんです。試験問題は前もってみんなに言っています。「この中から選びますから、これだけしっかり理解すれば大丈夫です」と。大学院についても、日本的な発表はさせないで、毎回毎回「あなたの研究はどのくらい進んでいますか」と、実

のある議論をして示唆したりします。

竜楽　地図を指し示して、どこでもやってくださいということになったら、それを指導する先生も大変ですよね。

リード　私は全然困りませんよ。学生それぞれのテーマは違うけれども、方法論でだいたい共通になるでしょう。この興味であれば、こういう勉強をしたほうがいいということです。指導することは非常に楽しいですし、そのうちに学生も楽しむようになります。

竜楽　そうすると、試験はどのようになるんですか。

リード　1年生の試験は七つの問題を出して、それから五つ選んで、概念の説明を求めるものですから採点しやすいですよ。他の学年だったら、研究テーマがどのくらい進んでいるか、どのくらい根拠のある結論に至ったかということが、採点基準になります。

竜楽　今おっしゃったのは、大学院生ですか。

リード　1年生から大学院までだったら、最初はわかったかどうか、最後は根拠のある結論に達したかどうかです。中間は半分半分になりますね。

竜楽　その概念を説明するということでしたら、具体的に例えばどんな問題があるんですか。

リード　例えば、「二大政党制とは何ですか」という問題に対して、常識的なことを言ったら、たぶん100点中5点ぐらいでしょう。いちばん大事なことは政権交代が可能になること。これは定義です。そして、その説明として事例を出せないと、私はこの人はわかっているということにしないんですよ。最も上手な人は、ドイツは三つの政党がありますが、政権交代があったから二大政党制と考えたほうがいいと説明し、イタリアは政党がいっぱいあるが、連立で二つの可能性しかないから、政権交代ができているから、これも二大勢力制として考えていいという説明をするんです。これでしたら100点満点です。こんな感じでしょうか。

竜楽　何だか楽しそうですね。

リード　楽しい。よくどうして学者になったんですかと聞かれるんですが、基本的に二つです。解る楽しみ。つまり「あっ、わかった」という気持ちですね。これは学者の生きがいです。そしてもう一つは、質問が出て、ちゃんと説明ができた時の嬉しさです。実は、私自身は研究者と思っているんですが、家内も娘も、お父さんは教育者だと言います。確かに、本当に学生を大事に思いますし、説明できるとか、授業がうまくいったということが一番嬉しく感じられるのは、家内たちが言うとおり教育者だからかも知れません。

竜楽　先生の授業や学生への取り組み方が、よくわかりました。やはり先生のような授業の仕組みをもっと沢山取り入れたほうがいいですね。

リード　ただ、日本的なことをすべて止める必要はどこにもありません。十分成功していることが沢山あるからです。昔はともかく、今は機能しなくなったことを改善する。そしてもう少し選択肢を増やすことです。実は、学生の要求は、そうなってきています。学生は、意外と「楽勝」を好みません。

竜楽　「楽勝」って？

リード　「楽勝」というのは、簡単にAを取れるような授業のことです。この授業はAを貰いましたが、勉強になっていないと言って、ときどき学部事務室に抗議があるそうです。私は勉強しに来たのに、どうして勉強させてくれないのかと。それには応えなければいけない。

竜楽　そうですか。凄いですね。

リード　私の1年生向けの授業で、一番機能しているのは、学生自身の選挙区の選択肢をA4判2枚のレポートで教えてくださいというものですね。

竜楽　選択肢を教えるって？

リード　自分の選挙区ではどういう人が出ていて、どういう政策を考えているかをレポートしてもらいます。誰がいいかということではなくて。

竜楽　どういう人が出て・・・。

リード　だから、論文の書き方としては、環境問題を大事にしている人だったら、この人に一票入れたほうがいいとか、女性問題について関心のある人はこの人、景気についてはとか、北朝鮮ばかり心配している人は、この人がいいとか。それから、今はこの人は安倍支持かどうかということも調べてみる。場合によっては、この選挙区の中にいい選択肢がないということを書いてもいいんです。

竜楽　レポートの目的は何んなんですか？

リード　関心を持ってもらって、投票率を高めるためのものです。特に、高校時代に受験勉強しかしていない人たちは、新聞を読まないんですよ。投票したいんだけれども、情報は何もないんです。だけど、1回勉強したら、投票したくなります。

竜楽　なるほど。それはいいですね。最後に学生や大学に望むことをお話ください。

リード　私がゼミでいつも学生に言っていることは、ちゃんとした卒業論文を書いた人が就職しにくいということはないということです。それは会社の要求が以前とは変わってきたからなんです。昔は、かなり決まりきったような人を欲しがりました。例えば法学を勉強しているとか、経済学を勉強している人です。しかし、今はそういう要求が少なくなってきました。そのかわり分析能力や自分で考える能力のある人が欲しいと言われます。そして就職活動の面接で、必ずと言っていいほど「あなたは4年間何をやってきたんですか」と聞かれます。その時に「はい」と喜んで答えられる人、更に「はい、ちょっと言わせて」という気持ちでいられる人。そんな学生になって欲しいと思っています。また、大学に対しては、中央大学に限らず、入試制度というか学部制度というのが固定化しすぎなんです。私は大学に入った時点では物理専攻だったんですよ。ですが、1年でそれを止め、政治学に変更しました。決めたのは2年生の後半で、アメリカではそれが普通です。しかし、日本では学部に入ってしまったあとで変えることは非常に難しい。なぜかというと、各学部別の入試があるからです。そして期間も4年間で卒業しないと日本では困るでしょう。5年掛かると、勉強していなかったと言われるからです。アメリカでは4年間の大学で、卒業するのに5年間というのが平均です。私は4年間で出ましたが、娘は5年間かかりました。彼女も、今は大学の先生です。それは悪いことではないんです。むしろいいことです。もう少し余裕を与えて、人生の選択肢の幅を最初から決めるのではなく、大学時代に決めることができるようになるといいのではないかと思います。今の入試制度は嫌いです。やめたほうがいいけれども、ゼロからということは無理でしょうが。これからすぐやめたら……（笑）。

竜楽　楽しいお話、どうもありがとうございました。

◇　　◇

リード先生は本当に日本語がお上手で、政治学科のラクゴ者にもわかりやすく語っていただきました。

奥様とのなれそれも素敵なお話でして。才能あふれるミセス・リードに一度お目にかかりたいものです。

落語にもしっかり者のおかみさんが登場します。明治時代の速記本を開くと〝お神さん〟と表記してあります。今も昔も〝苦しい時の神頼み〟で亭主は救われているんですね。

私事で恐縮ですが、11月5日に三遊亭竜楽著『笑いがわかればあなたは変わる』が実業之日本社から発売されます。なんとかヒットするよう祈願の毎日。これもカミ頼みかなー。